

納西族のドンパと彝族のピモにおける儀礼の伝統について — 葬送儀礼を中心として —

丸山 宏[※]

はじめに

本稿において、1995年9月8日より9月30日まで、「漢族と周辺諸民族における民俗宗教の比較研究 — 納西族・イ族と日本民俗宗教の比較民俗学的考察 —」を課題として、中国雲南省麗江納西族自治州および四川省凉山彝族自治州美姑県において行った調査にもとづき、納西族と彝族の、それぞれドンパとピモとよばれる司祭について、聞き取りから知り得た成果を述べたい。記述する内容は、納西族のドンパからの聞き取りの場合は、主として麗江県博物館の楊志堅氏による納西語から中国語への通訳を介して理解したものであり、また彝族のピモからの聞き取りの場合は、美姑県語文工作委員会の摩瑟磁火氏をはじめとする現地の研究者による彝語から中国語への通訳を介して理解したものである。あらかじめお断りし、また感謝の気持ちを表しておきたいと思う。ドンパとピモは、民族独自の複雑な宗教文化の伝統の保持者で、ともに民族独自の文字によって書写された経典を伝えて来ている。80年代から改革開放政策のもとで、彼らの宗教文化の研究も急速に進展し、既に多くの成果が挙げられている⁽¹⁾。当該の民族の言語も解さず、しかもきわめて短い時間の中で行った調査であるから、本稿には当然多くの限界があるが、しかし、聞き取りができたこと自体がまず貴重であり、調査中に聞き得た内容を記録しておくことが、今後の調査研究のための出発点になると考えたい。本文末の註において書いたのは、聞き取りの内容にかかわって、帰国後に文献調査で参照できた事柄であって、話者の話の内容自体や意図とは別個であるけれども、今後の研究の便宜を考えて、備忘のために記したものである。調査中には、實際上、民族語の原語は、便宜的にカタカナで筆記せざるを得なかったものが大多数であった。以下の本文および註に示したローマ字表記ならびに漢字による音写表記は、鍵になる原語の全てに当てることができたというには程遠い段階だが、それでも二次的な文献で知り得た場合に限ってのみ、初出の際に、参照し得た各文献の表記に随時したがって、あえて示すこととした。それが統一的ではないことを先に断っておきたい。

本稿の記述は、ドンパとピモから聞き取った多岐にわたる内容を含む。しかし、関心の所在と紙幅の関係で、主としてドンパとピモがいかに葬送儀礼をするのか、つまり人の死という問題に対する処理の仕方、特に死者の霊を祭って送り出すことについて聞き得たことに重点を置きながら述べた。今回の調査で知ることのできたピモによる治病驅鬼の儀礼および納西族と彝族におけるサニないスニとよばれる巫者のシャマニズムの活動の諸相については、別に志賀子市氏の報告があるので、それをも参照していただきたい。

※東北大学言語文化部助教授

(1) ドンパの儀礼について

・1995年9月12日および13日、雲南省麗江納西族自治州太安郷汝寒坪村にて、和成順氏より聞き取り。

1914年生まれ、81才。この村で生まれ育った。村の第二社にすむ。ドンパである。ドンパとしての技を身につけることは、父子相い伝えて自分で8代目である。5代前からこの村に来た。自分の息子のうち長男は、ドンパを継がない。彼は木工である。次男も継がない。しかし、姪子つまり叔父の息子にドンパを教えている。それは、次の二人である。和国柱62才と和国良67才で、彼らは7、8才の時から自分についてドンパになるための学習をはじめた。

自分の父は、和巴ホバという名前である。祖父は、和頌ホセーまたはホソンという。納西語では、アブソという。つまりアブとは爺爺おじいさんのことで、おじいさんのソという。その父は、和瑜、アブユイという。その父は、和若、アブルオと言う。その父は、和突、アプトウという。この人は長男で、汝南からここに来た。清代のことである。この弟つまり次男のひとは、アプガという。彼らの父は、和明、アプミという。

アプトウは、汝南に住んでいたが、羊をたくさん飼っていて、羊の病気が多かったので、羊を連れて、水の豊富な、よりよい環境のところをさがして、この汝寒坪にやって来た。はじめは小屋掛けして、それから次第に住みつくようになった。全部で5人兄弟のうち、3人を汝南に残して、まずはドンパでもあった長男のアプトウと次男のアプガが引っ越して来た。

自分は、若い頃はドンパではなくて、木工になりたかった。父親がドンパだったから、ドンパが何をするのかは、小さい頃からよく馴染んではいた。父親が儀礼をする時に、自分はいやでも、無理に連れて行かれたからである。36才(1950年)の時に、本格的にドンパを学んで、独立して儀礼を主催できるようになった。つまり大ドンパになった。大ドンパになる時の儀礼においては、自分を教えた師傅に感謝をする。特に同じ地域のドンパの先輩、父輩の名前や、関係のある神がみ、ドンパシロ 2Dto-lmba 2Shi-2lo⁽²⁾などの名前を呼ぶ。その時のための歌がある。この儀礼では、自分には神が附身したという感覚はない。しかし、そういう感覚のあるドンパもいると聞いたことがある⁽³⁾。

はじめて、自分が主催して儀礼をした時、主人の家の祖先、さらに納西族の始祖、ツエフボホミ 3Ts'ä-1khü-2bu-1bu-3mi⁽⁴⁾などと呼んで、その人の家を守ってもらう儀礼をした⁽⁵⁾。『スージー-スーポー』Shel jjuq shel ba という本があって、スージーとは、説く、言うという意味である。この本には儀礼の次第が書いてあって、この本によって儀礼をする⁽⁶⁾。『ドウモ』2Ddu-1mun という本もある。ドウというのは、する、行うという意味である⁽⁷⁾。

ドンパには種類があって、勝利神を祭るドンパと鬼神を祭るドンパを区別する。勝利神を祭るということには、祭天がある。祭天ムピユ 2Müan 1bpö⁽⁸⁾においては、16個の石と竹竿を使って、請神をする。これをンゴピユ 2Ngaw 1bpö⁽⁹⁾といい、ンゴは高い⁽¹⁰⁾、ピユは祭るという意味である。勝利神は、全部で16人いる。それで松の枝も16本必要である。またスジュ 3Ssu 3Dsu⁽¹¹⁾の儀礼がある。これは、集合的な靈魂にかかわるもので、結婚の時に、女の方の靈魂を男の方に

運ぶのである。靈魂についていうと、スというののは男の靈魂で、ンガーというののが女の靈魂である。ジフニベという誕生日のための儀礼もある。スー 2Ssu を祭る、すなわち祭疋または祭蛇も吉利の祭りである⁽¹²⁾。凶事のあとで、ノブ 3Non 1bbü という儀礼をすると六畜がさかえる。シジュピユ 2Szi 3chung 1bpö は、長寿、長命百歳をいのる、祈求平安の儀礼である。ジュというののは断ち切れない、ピユというののは祭りの意味である。この儀礼は 9 月 17 日に見ることになる⁽¹³⁾。以上が吉利に属する祭りである。

次に不吉利に属する祭りには祭風ハロリク 2Här-2la-1llü 3K'ö⁽¹⁴⁾がある。これは、不正常死の人のためにする、代表的な不吉の祭りである。超度には、2 種類あって、70 才以下の人の超度をシーカー Xi kai⁽¹⁵⁾といて、これは別に不吉というよりは中性である。70 才以上の人の超度をシーング Xi ngvl⁽¹⁶⁾といて、これはむしろ吉利に属する。不吉利の儀礼には、ドウク Dol Keel⁽¹⁷⁾という驅鬼がある。それにも 2 種類があって、ドウノが黒に、ドウパが白に分類される⁽¹⁸⁾。特に世世代々の家柄が基準で、あるドンパが吉利、不吉利のどちらの法事をするか区別があるのではない。ある家柄のドンパならどちらかしかしないと決まっているのではない。しかし、人びとが、どの儀礼を誰にたのむのかは決まっている。

ある儀礼に、どのドンパを依頼するかの基準のひとつは、たとえばドンパの生まれた年の所属つまり生肖と、死者の生肖とが合っているかどうかによって、ドンパが儀式をやるかどうか決める。次の組み合わせだったら、合わない。虎と馬、牛と羊、鶏と兎、龍と狗、豚と蛇である。村の中に適当なドンパがいないと、外からよんでくる。

よくやったことのあるのは、シーカーの儀礼である。シーングはあまりやったことがない。ドンパは、お経もダンスも 1 人でやったり、複数でやったりする。人数は決まっていなくて、1 人くらい少なくともよい。協力してもらう時は、たとえば念経を手分けして手伝ってもらう。

以下はシーカー儀礼の内容についてである。

シーカー儀礼の、シーというののは、人のこと、カーというののは、開路（道案内されて、出発する）、葬送のことである。リジ Rua ggeeq⁽¹⁹⁾つまり、長い道に行くこと、遠いところに出かけること、長い旅に出発するのである。

人が死んだ当日に入棺する⁽²⁰⁾。一般の人は入棺の時にドンパをよばなくてもよい。普通は喪礼は 3 日間かかる。まず請神してから、時間を決める。70 才以上の高齢で死んだ人の場合は、シーカーとシーングの両方ともやる。お経も法具も、手伝いのドンパも必要である。

朝の 8 時ごろに、ドンパが死者の出た家に行くと、門のところで親孝行である息子つまり喪主が、酒と香と軽い食べ物などを持って、ドンパを迎える。ドンパは、まず門のところで念経する。その内容は、「ドンパである私が来て、死者であるあなたを、お父さん、おじいさんのところに送るぞ。めでたくて幸福なところへ送るぞ」というものである。喪主はそこで、亡くなった自分の父の名を呼んでから、「もうドンパを呼んで来ましたよ」といって、ドンパを門の中に請じ入れ、ドンパはドンパ用に用意された部屋に入る。なお死者の出た家では、ビスウといて、楊柳の枝

を7本、中庭の門の外側の露天のところに挿しておく。

シジュビ Shee jil biuq⁽²¹⁾をする。第2日目で、2時間かかる。門の外でおこなう。これは、ズという怨みのもとになるものを、柳の木のところと呼んで、そこで切って消滅させる。さらに松の枝3本を用意して、枝の上に鬼の顔を描いて、これを切り殺す。松の枝で自然に人の形をしているのがあれば、それを使う。この怨みのもとになる悪い鬼に対しては、鶏を殺して、煮て、肉を取って、与え食べさせることで、死者の靈魂が行くのを妨害させないようにする。シジュビ経は、傍らで手伝いのドンパに読んでもらってもかまわないが、しかし経文の内容は、自分でも口ずさむようにする。ズには、大きいのと小さいのがあり、ズを管理するロルアメという鬼の総管がいる。門の外の定まった位置があり、ドンパシロの3人の子供を祭った壇を置き、その前に松の枝を3本ずつ左と右と前と3箇所挿し、中央の空いているところに顔を描いてある3体を置く。ドンパシロの3人の子供の前にはそれぞれに塩を供え、ズには鶏の血を置く。鬼に食事をさせて、鬼のもとの住み家に帰す。帰す時には鬼の顔は、外にむける。鶏の血は、遠くにすてる。儀礼が終われば、枝を9本ともすべて穴に入れて、挿して埋める。ズグという役割があって、木の板でズの頭を叩き壊す。これは死者の息子にやらせる。鶏の肉とご飯は、あとでお棺のところにもささげる。ズという鬼の意味は、怨みということである。例えば、葬儀に来たお客が、自分の料理が人より少ないとか、他人の方がたくさん食べたとかいう不満の意味も入っていて、この怨みを許してもらうわけである。

ウーフアーワシユをする。五方の神を祭る。約30分。中庭の中央に机を置き、机の上に小さな篩を置き、中に豚肉、米などの供物を入れる。机の周囲には柏の木をぐるりと挿す。その傍らで香を焚く。東、ニメ、日の出るところからはじめて、南、イチメン、西、ニメンゴ、日の沈むところ、北、ヘングロ、中央、ムルデユ、天地この土地という順に、お経を読む。死者の息子は、雄の鶏をかかえて、ドンパの後ろに立って、鶏をたたいて2、3回鳴かせる。これは、死者を五方の鬼の家には行かせずに、先祖のところへ行かせたいからおこなう。祭品は、お棺のところ、つまり霊前にもささげる。

ムウシユ Mu'eeq siul⁽²²⁾をする。殺鬼の儀礼である。20分から30分かかる。ムウシユというのは、鬼のこと、シユは殺すことである。すべての親戚、友人、嫁に出た娘などが持ってきた、亡霊にささげるための肉や酒を、奪われないように、鬼を殺す。1本の神牌、先端を5つに割って分けた竹の竿1本、卵1個、弓と箭を準備する。卵はたてた竿の上ののせる。松の枝を炉のところで焼いて、煙を出して、いぶして除穢をする。最後に卵を割って火にいれて、鬼に食べさせる。

グウスウロ Gu shul lal⁽²³⁾をする。1時間から2時間かかる。五色の糸をお棺に結ぶ。グウスウというのが、この儀礼の総称である。ロというのは、打つ、結ぶ、かけるという意味である。これは、五色の糸を、死者の息子が、父または母に、感謝し恩返しするためにお棺にかける。父1人ならひとつをお棺にかける。父と母ならば、2つをかけることもできる。グウスウは、形は、五色の布を1本の糸でつなげて通したものであり、死者とともに土に入れて、あの世にかついで行かせる。儀礼の間、死者の遺族たちは跪坐している。銭（ムジエ、ハジエという）や衣服

を祖先のところへ持って行かせれば、祖先たちがそれを受け取って、そのかわりに子孫を保護してくれるという考えがある。つまり、死者にたのんで、ずっと以前に死んだ祖先たちにも、まだ生きている子孫たちからの贈り物を運んでもらう。

ヌオルソ No'oq sal⁽²⁴⁾ をする。約5分間。ヌオルソ経を読む。ソというのは、降ろす、下げるという意味である。これは、死者の有能な性質、賢さ、つまりダ Ddaiq⁽²⁵⁾ を、死者の後の代の子孫にも残すようにたのむ。このダという言葉には、複雑で、いろいろな善い意味がある。自分の賢さを死者は、あの世に持って行かないように、子孫たちが死者と同じように賢くなるように祈る。生前の賢さが人ごとに違って同じではない時に、その賢さについては、死者が生きていた時の状況を反映させて、どんなに賢かったかを述べる。生前にさっぱり賢くなくて、悪かった人についても、すこしだけ善さを述べる。

ツオバジエ Chul ba jjill⁽²⁶⁾ をする。1時間かかる。天神を祭る。お棺の置いてある正庁の横で、緑の葉のついた柏の木を焼いて、煙を出し、天に煙を通じさせる。柏の木というのは天と関係がある。納西族は、天神を祭る時は、柏の枝を焼き、鬼を払う除穢ツスウ 3Ch'ou 3shu⁽²⁷⁾ では、松の枝を焼いていぶす。それから門の近くにも炉で火を起こし、その近くに供物、酒茶、ご飯、麵、肉、干し肉などを並べて祭る。天神には22神、地神には33神ある。天神に死者のあることを知らせる。人が生きている時でも、死んでからも、人も鬼も、天神と地神とが管理をしている。死者が出たら、神にたのんで、あの世に行くのを保護してもらう。この儀礼では2冊のツオバジエ経を読む。

ダグウ Ddaiq ngvl⁽²⁸⁾ をする。1時間30分かかる。霊前に、つまりお棺の前に、棹を並べて、その上に親族が贈り物をならべる。蒸留酒1本、干し肉1対、米8斤、銭である。銭はお米の上に挿すようにする。遺族、親戚、友人が、死者であるあなたにこんなに多くの物を送ってくれましたという内容のお経を読む⁽²⁹⁾。この時に死者の息子は、来客にお酒をついでまわる。

バミジ Bbai mi zheel⁽³⁰⁾ をする。バターの油の灯に火をともし。ひとつの容器に13本の芯をつくる。5本の柏を準備し、竹の入れ物に食事をそなえる。この時には、もう朝で、鶏が鳴く時、夜が明けて、鬼たちも立ち去る。

ズシヨング Ssee sherq ngvl⁽³¹⁾ をする。1時間とすこしかかる。長寿を希求する儀礼である。天が明ける頃におこなう。壇をつくり神の画像をかける。中央は最高の神であるサリヨウオデ 1Ssaw-2yi-2wüa-de⁽³²⁾、左側にドンバシロ、右側にヘンドウオパー Hä-ddü Ö-p'ër⁽³³⁾ である。神の画像は、今はもうないが、神は心の中にある。また三角形のいろりを準備する。卵と米酒、親戚と来客の人数分のドオスという五色の布を準備する。1羽の生きた小鳥を用意して、この小鳥の脚にドオス1本を結んで空に放つ。その時に同時にドオスを親戚と来客の全員にわたせる。これは、長寿を願うためにする。この小鳥をルウモアという。この小鳥は、羽のはえている神仙を象徴し、また生気をあらわしている。この小鳥が飛んで通過したところには、生き生きた神気がばらまかれる。この後すぐ、主人はダオスという卵を酒に入れた卵酒を準備して、来客たちはどの人も1人につき1碗ずつ飲む。これを飲むと、長生きできる。しかもこれで主人の家は、来

客に対する感謝の礼をあらわすことになる。このズシヨングが終わる頃には、第3日目の明け方になっている。

一般の来客は、通夜の晩には徹夜で跳舞をする。その時に、親戚と友人たちは「オゼゼ」⁽³⁴⁾という声をだす。ダンスは、ゆっくりしたリズムで1歩ずつステップする。かならず徹夜で、歌声を途切らさない。歌の内容は、死者の霊のために引路つまり道案内をする、また死者の霊が鬼にひっぱられて行かないようにする、というものである⁽³⁵⁾。

夜のバミジの時には、死者にまず先に食事をおそなえして食べさせる。それが済んでから、大きな鍋の中から、1碗だけは、中庭の外の、門のわきに、ぶちまけて外の鬼にも少し食事を分けてやる。ドンバヤ来客に、おかゆを1人かならず1碗食べてもらう。親戚や友人、近隣の人びとは、竹の籠に軽食、ノミババという糯米の餅のようなものを持ってきて、それで朝食を取る。

第3日目の午前中には、上祭の儀礼をする。2時間から3時間かかる。この上祭では、外の村に住んでいる、家族と比較的近い間柄の親戚が、ダグウの儀礼の時とは別に、贈り物を持って来る。親戚といっても、自分の本家を「オ」といい、骨という意味であり、妻方ないし姻親を「ノー」といい、肉という意味であり、区別がある⁽³⁶⁾。これらの人びとの贈り物は、一般の人のより、すこし多い。家の中に入ってから、霊前で叩頭して、祭品を捧げてもらう。その時に、捧げる手助けをする役割の人がいる。そしてドンバは、傍らでアズミイ Rherq zzeeq mil 経⁽³⁷⁾を読む。その内容は、あなたにこんなに多くの贈り物をもらいました、どうぞ贈り物を持って祖先のところに行くようにというものである。

ヘジュピ Heiq ree piq ⁽³⁸⁾をする。1時間以上かかる。机をだして、正庁のお棺のすぐ前から、中庭をへて、大門のところの外まで、神路図をずっと広げて敷く⁽³⁹⁾。門の外ところが鬼の世界で、そこから段階を踏んで、お棺の手前のところが神の住むところである。つまり、外が地獄で、お棺の前が天堂である⁽⁴⁰⁾。神路図の上の7冊の經典を、7人のドンバで地獄から天堂まで読んで行く。経を読む時は、外から内側の方へと移動しながら読む。まず鬼の部分を読むが、その前に鶏を殺して、その血をささげて、鬼に送る。神路図の7冊の段階はつぎのようである。①レイゾウ lLä-3ch'ou ⁽⁴¹⁾。泥と麦の粉で、人の顔をしているような鬼をつくる。この偶像のことをドンマ Dto-ma ⁽⁴²⁾という。使い終わったら、捨ててしまう。②ムナピ lMbu-lna 3p'i ⁽⁴³⁾。鬼の偶像を9つ使う。牛、馬、羊、狗、豚、蛇、鶏の頭をしたもの、それから大きなお腹をした2人のイダア 2Yi-lnda ⁽⁴⁴⁾という人物を祭る。③ヂヤング 2Ts'an-ngv ⁽⁴⁵⁾。動物の頭で人の身体の像を使う。牛頭の鬼⁽⁴⁶⁾は、特に頭が大きくて、9つの節のある棍棒をもっている。この棍棒は、準備する人が、小刀で節もきちんと刻して作製する。この儀礼では、牛頭鬼の像を倒して捨ててから、準備したお盆を5回たたいて後、そのお盆をひっくりかえして、本物の南京錠を持ってきて、錠を閉める所作をして、牛頭鬼の靈魂をお盆の中に閉じ込める。その目的は、死者の霊がここを通る時だけ、牛頭鬼を動けないように閉じ込めておくためである。終わったら、もとどおりにする。死者の霊を無事に通させるために、必要な時だけ牛頭鬼を閉じ込めるのである。以上の①から③までが、鬼の関門であるから、死者の霊はたいへん通りにくい。しかしこれらの鬼の関

門を通過してしまえば④からは、行きやすくなる。④リュジュという。⑤ダヅウ2Nda-ndzër (47)。ヅウというのは、樹木のことである。ここは原始林のようなところで死者の霊が迷わないように導かなければならない。松の枝3本を組んだ股のところに鶏の卵を1個おいて、お経を読む。⑥シアンチュという。翼のあるシアンチュという動物に、卵をやって、道を妨害させないようにする。⑦マツウという。ヘデユ1Hä-ddü (48)すなわち神の住んでいるところに到着したことになる。13回、米を撒く。神に米を与える意味がある。13の地方があるので、13回する(49)。この神とは、人を保護する神である。ヘジュビが終わると、神路図をかたづける。またオゼゼを踊って、さらにムドウ Mu ddu (50)を歌う。

送霊をする。第三日目の午後3時ぐらいになっている。出棺する前に、ムドウを2時間ほど歌い、ヌオルソをもう一度して、賢さをこの世に残すように祈る。人びとは、その間も歌舞し続けている。死者の息子をはじめ遺族たちは、霊前に跪坐する。いよいよ開路ルジエ Rua ggeeq (51)の儀礼をする時に、人びとは歌舞をやめる。さらに五方の神を祭る。それから、ドンパは、斧で浄水のはいった碗をたたきこわす(52)。水もこぼれる。こうすると、この後では、死者の霊はもうこの世に帰って来ることができない。お棺は、大門を出るまでは、手がかかえ持つようにして肩にかつがない。門を出てから、肩にかつぐ。ここまでで、ドンパの役割は終わる。

完全なシーカーは、今はもうやらない。1949年以降、ドンパの地位は低下した。それでも、まだ葬送儀礼のためにドンパを呼ぶ家が何軒かはある。現在でもやるシーカーでは、まずシジュビをやって、ズ鬼をはらう。グウスウロとバミジはやる。しかし、アズミイはやらない。五方の神を祭ることは、まだやる。

1949年に解放されたばかりの頃は、まだドンパの活動に対する禁止はゆるかった。だから、解放直後2、3年は、自分も独立してシーカーを主催できた。シーカーは、10回ぐらいは、主催したことがある。1953、54年ごろからは、禁止が厳しくなった。1982、83年ごろから、特にこのころ開かれたドンパ座談会(53)の後で、シーカーをまた主催することができるようになった。それで、小規模なシーカーを10回ぐらいしたことがある。

解放後に、ドンパの活動は迷信といわれた。県政府が開いた会議があって、大ドンパたちは、もう活動することを許されなかった。それで、もうやることができなくなった。この会議には、自分は有名な大ドンパではなかったから、参加はしなかった。しかし、他のドンパがやらなくなったのを見て、自分もやめた。文革の時、自分は民兵隊長であったこともあり、悪影響はなかった。ドンパ経典については、馬の背中に載せて運ばねばならないほど多くあった。神路図ヘジュビもあった。しかし、破四旧(1966年)の時、上から派遣された人が来て、持って行った。

自分の父親和巴は、自分が8才の時(1922年)になくなった。母親も父親の死後、1カ月してなくなった。それで、自分はこの村の同じ和姓で、地主であり大ドンパでもあった和波という人のところで育った。和波は、自分にとって叔父である。叔父の家で、作工となって、いろいろな仕事を手伝って育った。和波は、和国良の祖父である。和波は、1954年ごろになくなった。

・1995年9月14日、太安郷汝寒坪村にて、楊作林氏より聞き取り。

1921年生、74才。本人で第4代目のドンパである。村のなかの第三社に住んでいる。ドンパの知識を、父親から直接習ってはいない。叔父である楊才という人から習った。なぜなら、父親の楊三月アプイエは、30才ぐらいでなくなり、しかもドンパのことに必ずしも精通してはいなかったからである。祖父は楊雄アプシオンといい、曾祖父は楊義アプイという。自分の家では、このアプイの代からドンパを始めた。

自分は、ドンパの儀礼の中では、シーカーとシーングを一番多くやったことがある。それからスジュの儀礼をしたこともある。祭天もサンドを祭ることもやった。楊姓のドンパも、儀礼の内容は和姓のドンパと同じである。この村では、和姓の人が死んだら、楊姓のドンパをまねき、楊姓の人が死んだら、和姓のドンパをまねく。なぜならば、楊姓の人が死んだら、楊姓のドンパは、自分が死者の近い遺族、たとえば死者の息子として喪主などの役割をはたすので、ドンパとしての儀礼はやらないからである。葬送儀礼以外であれば、どの姓のための儀礼をひきうけて主催してもよい。

以下は、ハロリク儀礼の内容についてである。

ハロリク⁽⁵⁴⁾という風を祭る儀礼がある。情死者すなわち心中による死者または溺死者に対して、この祭風をする。この村でも以前、心中事件があって、ある大ドンパが祭風をやった時に、自分もドンパとして参加したことがある。その時の模様はつぎのようである。7、8人のドンパで、3日間かかる。松の木、山にはえる白楊の木、鶏、羊を準備する。白楊は、ロコといい、まるい葉をしている。情死した二人をあらわす男女各1人の人形を紙で作る⁽⁵⁵⁾。人形の高さは30から40センチぐらいである。また松で家の形を作る。そこに首をしめて悶死させた2羽の鶏と、米、麵、食品などを置く。第1日目には、遺族の自宅で、クウバ3K'u-1byuという牌版を何百枚も作る。松の木で作る。この牌は、神の牌と鬼の牌に分れる。鬼の牌は、平たい頭の牌であり、数は少ない。全ての牌は、2度とは使わないで、第3日目に全部焼いてしまう。第2日目もほとんど準備するだけである。遺族の自宅で、松の木と白楊の木に装飾をほどこす。これをジュシュという。第2日目の夜に、儀礼の装置をつくる工事をはじめの内容の起工経というお経を読んで、徹夜で朝までドンパ踊りをおどる。この時が一番にぎやかである。

第3日目に、準備したものを野外の亡くなった人の家の畑もしくは山に持ち出す。どの家でも自分の家の山などに祭風場を設けてあるのが通例で、1度そこでやると、その後はその場所でつづけてやるような一定の場所がある。松の木と白楊の木を地面に挿してたて、その間に線をはり、鶏を殺して線にかける。また神牌などをたくさん挿す。具体的には、前に松の木をたて、後ろに白楊の木をたてる。その間に線をはる。線の松の木よりのところにメスの悶死させた鶏をぶらさげ、白楊よりのところにオスの悶死させた鶏をぶらさげる。これは2人の首吊りの象徴である。ひとりで死んだなら、鶏は1羽でよい。線には、2人の生前の生活用品をかたどった紙で作ったいろいろな品物をたくさんぶらさげる。松の木のすぐ下に、両人の人形を、男左女右にして置く。

白楊のわきに、神牌を12本挿す。

準備ができれば、祭風経を読む。これは量が多くて、積み重ねると、お経の高さは30から40センチぐらいにもなる。読み終わったら、木の間にはっていた線を切る。これを切れば、2人の霊は、祖先のところにはもう行けなくなる。小祭風の儀礼の時には、この線はない。一般の不正常死の場合は、正常死の靈魂のための普通の超度儀礼の時に、その儀礼をかりて、ついでに呼びもどして、正常な靈魂といっしょに儀礼をしてやって、ついて行かせる。それで祖先のすむところへ行かせることができる。しかし、心中で死んだ場合は、その靈魂は、祖先のところではなくて、ツオンバトウへ行かせる。ここは、いわゆるムルオヨスグオ⁽⁵⁶⁾である。ムルオは雪山、ヨスは第三、グオは国、つまり雪山の第三国である。心中したものの遺体、または不正常死のものの遺体は、一般の人と同じ火葬場の中では焼くことはできず、少し右側のわきの方で焼くことになっている。なお、2人で心中しようとしたけれど、2人のうちの1人が生き残ってしまったら、その人が、死んだ相手のための祭風の儀礼のすべての負担をしなければならない。

・1995年9月15日、太安郷天紅村にて、和国良氏より聞き取り。

1929年生まれ、66才。ドンパである。ドンパとしての名前は、ドンホンという。ドンというのは、ドンパであることを示す。小名を石紅シフといった。現在の一家の構成は、6人いる。自分と自分の妻、息子と息子の嫁、2人の孫である。自分たちには息子以外に、あと2人むすめがいたが、2人とももう嫁に出た。嫁入り先は、長女は太安郷へ、次女は太安郷のなかの吉子村に行った。

この村は、天紅という。納西語でムシュゴという。ムが天、シュが紅である。一説では、天に近いので、天といい、ここ一帯に杜鵑花ヤマツツジの花がたくさんあって、3月から4月に盛んに咲いていたから、紅という。

自分の家は、12代前に、この村にやってきた。世世代代ドンパの家柄である。もとは汝南化というところからきた。この汝南化は、すぐれたドンパがたくさん出るので有名な地域である⁽⁵⁷⁾。

原則的にいうと、今はこの天紅村には、3つの大きな家族がすんでいる。そして同じ家のドンパが、自分の家族のために葬礼をすることはできない。3つの家族というのは、東族と楊族と和族である。絵文字で書いて示す。そして、現在は東族という呼びかたは、なくなっている。東族は、和族の1部分に吸収されたからである。最初に、この村には、楊族の1家族しかなかった。それで、ほかの家族である和姓のドンパがきた。以前には、東姓のドンパもいたけれども、その人たちは、今はもうドンパをやっていない。つまり、12代前に、この村には1つの家族しかなくて、ほかの家族のドンパが必要だったので、自分の家の先祖が、この村にきたというわけである。

自分の父親は、和合ホヘという。ドンパ名は東禄ドンリュという。祖父は、ドントウまたはアプトウという。曾祖父は、ドンアオまたはアプアオ、別名バシャアという。この3代は、確実に家の中でドンパの儀礼を伝えてきた。自分には息子がいるが、解放後になったから、もう息子は

ドンパを習わない。

ドンパの儀礼の種類のうち、白事である喪葬には、70才以下の死者のためにするシーカーと、70才以上の死者のためにするシーングがある。それから祭風のハクがあり、大祭風と小祭風がある。祭風の儀礼は、今はなくなった。駆鬼はドウクと総称する。小さい駆鬼をドウバクといい、白に分類し、大きい駆鬼をドウノクといい、黒に分類する⁽⁵⁸⁾。大きな駆鬼は、今はなくなった。またドウオブという駆鬼の儀礼がある。プというのは、送るとか、くずすとかいう意味である。おめでたい紅事の儀礼には、スジュという結婚の儀礼、ムピユという祭天の儀礼、ドウピユ 3Dtv 1bpō⁽⁵⁹⁾という五穀を祭る儀礼がある。

ドンパの儀礼で、最近復活したのは、シーカーとシーングである。この村では、しかし、シーカーの時に、上祭の儀礼の1部分をするのみである。汝南においては、シーカーのすべての儀礼が、全部行われることがある。ドンパの儀礼に対して、村の幹部が干渉することはないが、しかし一般の人びとがあまりやりたいと思っていないのが実情である。

この村の人は、全部火葬する習慣である。そのうち、約3割が火葬の2日目に骨を拾う習慣がある。火葬場は、村の東北方角にあって、北にむいている。かならず、松の樹があって、それが山神である。死者の死亡時の年齢によって、焚く場所が異なる。人が死にそうな時に、いろいろの傍らの屋根に小さい穴を開けてやることがある。

以下はドウク儀礼、ドウオブ儀礼、ドウピユ儀礼の内容についてである。

ドウクという駆鬼の儀礼は、夕方の5、6時ごろから始めて、夜の9、10時ごろまで、およそ2から3時間かかる。家の中で儀礼をする。なぜ駆鬼をするかという、畜類が平安でなく、人に病気があったり、不幸があったりすると、この儀礼をする。ドウシャパという人形を、麻と木でつくる。大きさは、人の身の丈ほどある。人の衣服をこれに着させて、悪いものを全部つけてしまう。この人形に、悪いものを送ってくっつけてしまう。お経を読むが、その内容は、肉をやるから、悪いものを運ぶようにしなさい、という意味である。この人形に、悪いものを運ばせて、村の東南角の境で、焼いてしまう。

今でも、畜舎の外側の壁に、白い石灰の手形をべたべたとたくさんつけてあるのは、子豚がたくさん生まれると、これをつける。鬼は白い色がきらいだから、という。

ドウオブという鬼送りの儀礼は、解放前にやっていたが、今はもうない。この儀礼は、1年に1回、村落全体でやる。40から50戸が参加して、毎年農暦の7月15日にやる。この日におこなうことは、もともと決まっていることである。毎回、どの家でもドウオという名の鬼の人形を、松の木でつくる。そして、その鬼の背中に、蕎麦の粒の食事を背負わせる。これは鬼飯である。蕎麦の粒を鍋で煎って爆発させてつくる。この鬼飯を背負ったドウオ鬼の人形を、ドンパが1軒ずつたずねて、集めて回る。その時、ドンパは1軒ごとに、お経を読む。そのお経は、ドウオブテグ経といい、鬼が祟りをすることを許さないという内容である。鬼を集めて回ったら、村の外の東南の角で、鬼の像を焼く。鬼の像を焼く時にも、ドウオブテグ経を読む。焼いた後で、皆で一

緒にその場所において、綿羊と鶏を煮て、食事をする。漢族の中元という言葉は知らない。

ドウピユは、五穀の豊作を祈る儀礼である。5月もしくは6月に、大雨や雹が降るので、それを避けるためにおこなう。そのやり方は、白楊の木をたてて、その先に卵をのせる。卵が破れたら雹が降るから、それをたてて、鎮圧する。ドウピユのドウには、天（の災い）をささえるという意味がある。お経の内容は、天災をくたさないようにしてくださいというものである。

和国良ドンパの生涯。17, 18才（1946年ごろ）の時、国民党の開いた初級中学を卒業した。この村では、自分と同期では、たった2人しか中学まで行かなかった。学歴を活かして、1949年から1958年までの10年間は、プミ族の小学校の先生をしていた。1958年の反右派闘争の時に、解放の際に自分の家が地主に分類されたこともあって、右派であると決めつけられた。1963年から、また村で農業に従事して今にいたっている。この村には解放の時、地主に分類された3軒の家があって、和姓が2軒、楊姓が1軒である。自分の父である和合、ドンパ名ドンリュは1947年になくなった。自分は次男で、ほかに長男である兄と3人の姉たちがいる。兄は若くしてなくなった。自分は12, 13才の頃に4から5年間（およそ1941から1945年）、夜になると毎晩、父親からドンパ文字、ドンパ経典を習った。15, 16才のころに父親について行って、一緒にドンパの儀礼をした。1947年前後にシーカーを3回だけ主催したことがある。1949年以降は、1回だけである。

家にあったドンパ経典は1953, 1954年にその一部分を人に持って行かれた。そして1964年の時、四清運動があって、家にあった経典や位牌その他のものまで、全部持って行かれて、すべて焼いてしまった。

ドンパ文字は、どの経典の、どの物語であっても、その最初にある部分をはじめに習う。自分も父親から最初にその部分を教えられた。つまり洪水の後で、天、星、流れ星、太陽、月、大地、石、水、木、山、川が、また出てきました、というところを始めて習う。天地開闢のことである。それから、えー、むかしむかし、という意味の、アーラムシュニーということばを習う。そのなかで、ラという文字は、虎の顔の絵を書いてもよい。（文字を書いて示す。）ドンパのダンスについて、まず習うのは、鬼を鎮める舞いである。リュという刀、ルシュという弓矢、ダムバラという揺鼓を手を持つ。（刀の代わりに棒を見つけてきて、基本動作をあざやかに演技して示す。）主催の大ドンパは、ムトウ 3Müen-It'u⁽⁶⁰⁾ という手杖つえを持つ。このムトウの頭部で、自分の父親が使っていた実物がまだ残されている。その側面には、ヘンドウオパーとドンパシロの像が浮き彫りにされている。ヘンドウオパーの方が、ドンパシロよりも神として地位が高い。

(2) ビモの儀礼について

・1995年9月22日、四川省凉山彝族自治州美姑県三河村、ワシタチュ氏より聞き取り。

ワシタチュ氏は、50才、農民である。1991年に風湿病にかかり、シャマンであるスニに儀礼をしてもらった。その時、ビモに依頼をして、草で鬼を編んでつくってもらった。その鬼のなかには、高さが2メートル以上、屋根の高さに達するものがあつた。その鬼の名は、ジアヌオ家諾、

アサ阿薩，ニチ尼日，スアルスリ四爾四領という。

・1995年9月23日午前，美姑県基偉村，アジョアティ氏より聞き取り。

アジョアティ氏は，51才，ピモではない。祖先を祭ること，死者の靈魂を祖先のすんでいるところに送るのは，五穀豊穡，家畜平安を祈るためにする。祖先のいる場所は，シシムハダというところである。ニムツビ⁽⁶¹⁾という送靈の儀礼をやらないと，死者の靈魂は，たたる。もうすでに送って，シシムハダに行った靈魂が，農曆の11月上旬の彝族の新年節の時に家にもどってくるが，この靈魂には白い色のトウモロコシの餅，甘蕎麦の餅をそなえる。まだ送っていない祖先の靈魂には，黒い色の苦蕎麦の餅をそなえて，区別する。

新年の元旦の朝，鶏が鳴いて，祖先がもどってくる。まずアルツァソという除穢の儀礼をする。この時，自分たちでやってもいいが，ピモがくることもある。

・1995年9月23日午後，美姑県覺洛村，ジクニャニャ氏より聞き取り。

1945年生まれ，50才。白彝であり，家伝の7代目のピモである。13才の時から，ピモを学ぶ。兄と父親に習った。17才の時に，独立して，自分で儀礼を主催できるようになった。ピモの儀礼には，つぎの種類がある。シャブ儀礼⁽⁶²⁾は呪咀を返すためにする。ヅヂョ儀礼⁽⁶³⁾は，鬼に呪文をかける，驅鬼の儀礼である。これには経書がある。この種類の儀礼が最も多く行われる。つぎにツビという送靈の儀礼がある。これは，何世代もピモを代々伝えた家のピモでないといえない。ニムツビというのは，一族ひいては彝族全体の子孫繁栄にかかわる儀礼である。自分はこのニムツビの儀礼を多くやった経験がある。最近とくに多いのは，ニョツツ⁽⁶⁴⁾という呪鬼の儀礼と，ニジイビ⁽⁶⁴⁾という驅女子鬼，すなわち3才から17才ぐらいの女の子供が鬼になったものを追い払う儀礼である。

・1995年9月25日，美姑県合姑洛郷覺村，チュビクシ氏より聞き取り。

1951年生まれ，44才。ピモである。弟のチュビドグ氏，30才もピモである。伯父のチュビチュニ氏，82才，ピモである。9月23日に会ったジクニャニャ氏もきていて，聞けば，チュビクシ氏の母親が，ジクニャニャ氏の姉であるという。チュビクシ氏にとっては，ジクニャニャ氏は母方の叔父というわけである。チュビクシ氏の家は，25代にわたりピモである。8代前に，巴普村からここにやってきた。

この家には，多くの彝文經典が所蔵されている。約40年前に書写されたものが多いという。ニムガポ⁽⁶⁶⁾すなわち病氣治しの儀礼に使う真新しい神枝図もある。ガポとかガポとかいう儀礼は，病氣が長くて治らない時におこなう。ニムツビの時につかう經典は15種類ある。15本をひとまとめに紐でくくっている。ニムツビという儀礼は，人が増えるようにという目的でおこなう。この家のニムツビの經典は，父親の伝えたものである。經典は，写して伝え，ふるくなった經典は，山洞に入れなければならない。ムシュ経は，祖先の靈をよぶ時の經典である。神靈をよぶ時にも

使う。

ビモの法具⁽⁶⁷⁾には次のものがある。チャクという神扇は、祖霊を送る時には、後ろにむけてあおぐ。駆鬼の時には、先のほうに、外向きにあおぎだす。めでたい儀礼や呪咀の儀礼では、銅製の扇でよいが、ニムツビの時には、かならず竹製の扇に限られる。扇の軸の先端は鷹の頭、末尾は鷹の広がった尾羽根をかたどり、前の方に龍、虎、彪などの動物がのっており、また手に取る柄の部分は4本に分れていて、天をささえる四方の柱をあらわす。鷹は鶏を殺すことが多く、鶏がもっとも恐れる鳥である。龍は麻風病の鬼がもっとも怖がる。虎は、病鬼を追い払うことができる。扇のまるい面に7つの円形の模様、7つの穴があるのは、特別にニムツビができるビモだけに限って持てる。

ホボという神笠があり、ニムツビを1回主催すると、天辺のところに飾りの層を1層ふやすことができるので、ニムツビの経験回数は、この笠を見るとわかる。

ウトウという神箭筒がある。先端が二股に分れていて、儀礼の時、鬼の板をその又で挟み込んで攻撃する。筒を手でひねって、もむと音が出て、それは攻撃の音である。精神の病をひきおこす鬼が特にこの神箭筒を恐れる。遠くの間から取ってきた竹でつくる。

ビヂュという神鈴がある。主に鬼を嚇す時に使うが、神を迎え送るのにも使う。神を迎える時はゆっくり鳴らし、送る時は速く鳴らす。神の種類としては、例えばビモの靈魂を呼ぶ。儀礼の時だけ、神枝のうえに着くのである。普段は、これは天のうえにいる。また四方に浮かんでいて、大きな山のうえにいる。そこで、儀礼の時は火を起こして、煙で知らせる。

占いに使う経典がある。例えばチュビジュエアルという人が、51年前に写した中断鬼気経という経典をひろげてみると、中に1才から61才までの各年齢ごとに患る病気の種類がすべて出ている。特に病因は、生まれた時に、その人の母親の年齢がいくつだったかで、母と子の年齢の相性を調べ、発病の年回りを計算して占うことができる。このことは、クセテジュ経に書いてある。何才まで生きられるかも計算できる。子供が生まれた年と母親がその子供を生んだ年を、方角におきかえて、1年ごとに位置を少しずつずらして、ぐるぐる回り、もし2つがぶつかる場所があると、それが危ない年とみる。男と女は、反対方向に回る⁽⁶⁸⁾。

最も古い時代のビモというのは、アプチュボとアスラジである。すべての彝族は、2つの家、つまりグフとチュニの子孫である。ビモの技法を創造したのは、このうち、チュニの方の子であったチュニチュボという人である。チュボについて次のような話がある。昔、人類は大変に数が少なくて、生殖力も大変に弱かった。7人や8人の子供を生んでも、みんなすぐに死んでしまう。どうして、人類だけこんなに子孫が少ないのか。ブタやニワトリは、たくさん子孫があるのに。チュボは悩んだ。チュボは、ある時、父が死んで、その頭の骨を落としてしまった。すると、1羽のニワトリがきて、父の頭の骨を口に挟んで、家の後ろの方に逃げてしまった。そして、ニワトリは家の後ろの竹林のなかにとまった。チュボは、頭の骨をさがしに竹林に入って行ったが、見つからなかった。それで、しかたなく竹の根を取ってきた。まったくブタやニワトリはふえるけれど、人間はなぜふえないのかと思っていたチュボは、自分で竹の根を頭の骨のかわりに供奉

した。すると間もなく、子供がたくさん生まれた。これは、祖先の霊をまつたからだ。竹でまつってから、チュポは、ニムツビの経典をつくった⁽⁶⁹⁾。チュポから30代を経てヴィスラジという人の代に、ニムヴブをつくった。ヴィスラジから25代目がちょうど現在である。つまり、チュポから今まで55代を経てつながっている。

この村は、第4組で、全部で22戸、人口は117人いる。すべてチュビのものである。ビモの年齢は、20代が1人、30代が3人、40代が3人、そして82才が1人である。儀礼を主催できるビモは、9人いる。それから小ビモは23人いる。儀礼を主催できるビモに50才、60才、70才の年齢のビモがいない。この年齢のビモは、みんな死んでしまった。1950年代になくなった人が多い。

ニムツビには、3種類ある。大型のは、牛を2頭使う。チャチャという儀礼で、祖先をよんで、牛を食べさせる。これには5日5夜かかる。中型のは、羊2頭で、3日4夜かかる。小型のは、鶏1羽、羊1頭で、3日かかる。規模の大小は、主人の家の人の数と経済力とに関係がある。ニムツビをやる時には、女方の親戚、娘、姑、妹などの家にも知らせると、みんな犠牲を持って、参加しにやってくる。

ニムツビは、つぎの15段階のプログラムからなっている⁽⁷⁰⁾。①ニツヅア、もしくはジュジョといい、呪鬼をする。②グツグトといい、マドと称する位牌をつくる。③チャジャ⁽⁷¹⁾といい、祖先の靈魂をよび、食事をだす。④ムベ⁽⁷²⁾といい、参加者が犠牲をたたく。⑤デイシヨ⁽⁷³⁾といい、清潔にし、浄化する。デイとは、投げ入れるという意味である。⑥もう1回浄化する⁽⁷⁴⁾。⑦スシャ⁽⁷⁵⁾といい、ある種の超度をする。ここでは、悪い祖先を清める意味がある。ここまでの儀礼は、汚れをはらう意味合いが強い。①から⑦までの段階を、黒の段階とよぶことができる。ニムツビには、男性の子孫が祖先に借りていた欠債をかえすという意味がある。嫁に行かなかった女の死者の霊にもマド位牌はあることはあるけれど、上の黒の段階で送ってきってしまう。また息子をもたない人の霊についても黒の段階でおわってしまう。⑧チコ⁽⁷⁶⁾といい、山羊をしる。この山羊は、ここで食べるのではなく、ビモが持ち帰る。これは、花の段階である。黒と白の中間の段階である。⑨ニフ⁽⁷⁷⁾といい、除穢をする。⑩チジュジョ⁽⁷⁸⁾といい、古い位牌を新しい位牌と入れ替える。古い位牌は山洞にすてる。⑪シア⁽⁷⁹⁾といい、祖先を頌める。⑫ヂゾオ⁽⁸⁰⁾といい、生殖力の繁栄の儀式である。松の木を切ってきて、男性たちが、取り囲んで座る。枝の数は奇数にする。それは、子孫が多いことを示す⁽⁸¹⁾。⑬チエといい、マド位牌をならべる。木を割って、その中に位牌を排列する。夫婦つまり父母のマドは、かならず1対ずつ組にして入れる。この時に、先に死んだ妻(夫)と、その夫(妻)のマドをいっしょにしてやる。もし女の子がいなかった場合は、その人のマドの中に入れてやることはできない。⑭ブエ⁽⁸²⁾といい、ムンボオと称する雄の豚とチツヨと称する雌の綿羊を殺して、2頭をくみあわせて、交尾させる。⑮シンムガンツといい、祖先の霊つまり位牌を背負って、決まった山の岩穴まで行く。祖霊を送るのである⁽⁸³⁾。女性はついて行かない。以上の⑨から⑮は、白の段階である。15の段階は黒から花を経て白にいたるように構成されている。

ニムツビは、普通は農暦の11月から3月の冬場にやることが多い。祖先をまつる必要がある時

に、臨時的にやるので、定期的ではない。去年の3月にやった。チュビクシ氏自身は、これまでに7回主催したことがある。ジクニャニャ氏は、ニムツビを20回やったことがある。

・1995年9月26日午後、美姑県巴普村、ヴォルジグ氏より聞き取り。

1936年生まれ、59才。サニである。白彝に属する。祖先にサニになった人はいないが、ピモだった人はいる。しかし、ピモの家柄ではない。アサと称する守護神をまつて、サニになった。チエチョビルというところのジクショグという名前のピモがきて、アサをまつて、サニになった。はじめ、ピモは自分の病気をみて、これはとても不思議な不吉な病気だといった。ツヂ⁽⁸⁴⁾の儀礼をして病気を治そうとしたが、治らなかった。ピモがアサトウというアサを祭る儀式をしたら、病気が治った⁽⁸⁵⁾。ピモが、ヴォルジグ氏のアサをよび、羊の肉を食べさせた儀礼の時の状況は次のようである。まずピモがお経を読み、もしアサが来れば、ヴォルジグ氏の身体が震えることになる。最初はピモが羊皮鼓を持っていたが、ヴォルジグ氏がその太鼓を奪い取り、次に口で直接に羊をくわえて、羊をひっくり返し、ふりまわして投げた。さらにすごい勢いで飛び跳ねた。

儀礼のやり方をピモに習うこともある。お経も習う。ピモは教えてくれる。自分はチュピブハというピモに習った。

ピモの儀礼に参加することは、自分は経験がないが、牛を殺すような大きな儀礼でピモが請神して神をよんでいる時に、本当に神が座に降りてきたのかどうかは、サニにしか見ることができないから、その場面にサニをよぶことがある。

おわりに

本稿は、1995年9月の調査において聞き取り得た、ドンパとピモによる葬送儀礼の伝統について述べた。本文では聞き取りをできるだけ再現するにとどめており、註では文献参照の作業と、ところによって重要な事象にコメントを付することを試みた。詳しく聞き直したい事柄も多くあって、将来における納西族と彝族の葬送儀礼の共通性と差異性の検討、ひいては漢族を含む東アジア全体のなかでの比較論的な視座からの葬送儀礼研究のためのひとつの基礎としたい。当然のことであるかもしれないが、痛切に感じたのは、長い時間がかかって困難をきわめても、Rock1952のような詳しさと分量で、豊かな儀礼伝統を保っている地域に限定して、儀礼と經典に深い知識をもったドンパとピモに教えられながら、納西族の場合には、シーカー、シーング、ハロリクについて、彝族の場合には、火葬、マドの作成、ニムツビについて、実際の儀礼の全過程を見て、口頭表現もふくめて、すべての經典を原語からじかに順番に詳しく訳註していくことが、確実に大きな比較のためには必要であるということである。

註

- (1) 既に次の2冊の既往の関連論文を集成した書が編まれていることが、ドンパとピモの研究の重要性を示している。郭大烈、楊世光(編)1991、左玉良、陶学良(編)1993。
- (2) ドンパ教の祖師とみなされているドンパシロについては、Rock1937a、李霖燦1984、363-372、

- 和志武1994, 58-65, 木麗春1995, 58-65などを参照。木氏はドンパシロよりも、むしろ阿明什羅を実質的な教主とみる。
- (3) 大ドンパに就任するという目的だけの儀礼は、特に分類されていないようである。Rock1952, 25-30の15種類の儀礼分類, 和志武1993, 390-411の10種類の儀礼分類にはみられない。特定の就任儀礼をしなくても、何らかの儀礼を独立して主催することで、大ドンパとみとめられたと考えられる。和成順氏が1950年ごろに大ドンパになったことは、解放直後は活動できたことを示す。神が附くという感覚がないことは、ドンパが本来はシャマンではなくて司祭の類型に属することと関係すると思われる。
 - (4) ツエフボホミは天から降りてきた納西族の女の始祖である。Rock1952, 675-688, 李霖燦1984, 334-351, 和志武1994, 203-212。
 - (5) この儀礼において人類遷徙記を読んだ可能性があるが、儀礼名称はあきらかでない。
 - (6) 軼聞録, 古聞雑記をさしている。和志武1993, 411。
 - (7) 特定の儀礼ごとの経典目録とプログラム解説の記されたジャンルをさしている。たとえば、祭蛇の場合について, Rock1952, 39-40にみられる。和成順氏が、ここで儀礼次第書に言及したのは、大ドンパになりたてで経験が浅い時、特にこの種の本が重要だったからではないかと思われる。
 - (8) ムピユについては, Rock1948, 李霖燦1984, 219-248, 戈阿干(編)1988を参照。
 - (9) 勝利神については, Rock1952, 135, note (122), 140-1, note (133), 木麗春1995, 69-92を参照。
 - (10) 勝利神ングを漢字で高と音写することが多いので、この説明になったのであり、必ずしも原語の意義と合うわけではない。
 - (11) スジュについては, Rock1952, 250-1, note (527), 和志武1994, 230-3, 木麗春1995, 136-154。
 - (12) スーを祭る儀礼に使う経典の訳注は Rock1952, 71-624, 関連する経典の訳は, 李霖燦1984, 372-388, 和志武1994, 111-171に見える。
 - (13) 9月17日午前10時20分より午後3時50分まで、麗江県博物館の中庭で、シジュピユが行われ、和成順氏、および彼の二人の姪である和国柱氏、和国良氏もドンパとして参加した。この儀礼では、花神ホー1Hoを迎えて、屋根に花の梯子をかけて大ドンパが昇って、上から米、水、酒を撒き、人びとが下でうけとめて飲食すると長生きできる。この長寿を祈求する核心部分の前後には、豚を殺して勝利神を祭ること、戦いの神のダンスをしてから穢鬼の寨をこわすこと、蛇スーを迎えて祭ってから解放し自然にもどすこと、などの多くの基本的な儀礼が組み合わされている。このため聞き取りという方法だけでは理解できない、各種の儀礼の実際がよくわかった。花神のホーは、男の生殖力、おびただしい星がある天の銀河をあらわす。Rock1952, 91, note (43)。
 - (14) ハロリクについては Rock1939があるが、儀礼の過程は詳述していない。儀礼の過程を知るには、和士成(述)、和力民(整理)1994, 18-27が詳しい。使用される経典の目録は、和志

武1993, 392-4に示されていて、その部分的な訳は、雲南省少数民族古籍整理出版規画辦公室（編）1986, 和志武1994, 175-194, 250-2にある。なお、本文に9月14日に楊作林氏が述べたハロリクを紹介した。

- (15) 和志武1993, 397-9にRee meil (Xi kai) 開喪經80種をあげている。Xi kaiの別称であるRee meilは、死者に路を教えるという意味であり、この儀礼に使われる經典の訳がある。Rock1955, 1972。
- (16) 和志武1993, 399-401にXi ngvl 超薦經54種をあげている。Rock1952, 27によると2Khi 3nvは、死後3年以内に死者の身代わりの人形を使って、死者の靈魂を祖先のいるところまで送る儀礼である。この儀礼を済ませなければ、死者の靈魂は祖先のいるところにまだ帰っていないと考えられたという。この説と和成順氏やほかのドンパたちがいうような70才以下と、70才以上で区別する説と、ずれがある。和成順氏の説は、シーングで何をするかというより、何才以上の人の靈魂ならシーングをする資格があるという点を強調している。死後すぐの当面の処理のための開喪シーカーと、一定期間を経てから死者を完全な祖靈に変容させるための超薦シーングとの2種類の儀礼があったが、しだいに開喪のほうだけが多くおこなわれ、長寿の死者の場合にも、超薦を時をおかずに関喪とくっつけて1度にかつ簡略におこなうようになったために、儀礼の意味の説明の時に、強調点が変わったからではなかろうか。拙稿1995, 35に発靈の段階で超度をやってしまうという聞き取りを紹介した。シーングに使われる經典の訳は、雲南省少数民族古籍整理出版規画辦公室（編）1987, 和志武1994, 172-182におさめられる。納西族の葬送儀礼の解釈については、トーテミズムや進化論の観点が濃厚であるが、民俗文化をひろくふまえた木麗春1995, 154-176が興味深い。
- (17) 和志武1993, 394-7に消災經91種をあげる。驅鬼に使われる經典の訳は雲南省少数民族古籍整理出版規画辦公室（編）1989にある。なお、本文に9月15日に和国良氏が紹介したドウク儀礼を述べた。
- (18) 2Dto 1na 3k'òと3Dto 1p'er 3k'òは、Rock 1952, 29に見える。黒い方が大規模であるという。
- (19) 和志武1993, 399の開喪經第77番、獻坐騎、馬之來歷經をさすと思われる。第76番のGguq zailとともに死者に馬を準備して出発させる趣旨である。
- (20) 汝寒坪村の、入棺前後の習慣については拙稿1995, 34-5を参照。
- (21) 和志武1993, 397, 開喪經第4番、驅死仇咒經と題する。
- (22) 和志武1993, 397, 開喪經第16番、殺猛厄鬼經と題する。これは、和志武1994, 66-74に猛厄緒として訳がある。
- (23) 和志武1993, 397, 開喪經第2番、蓋棺釘塞經と題する。Rock1955, 107-132に、この經典の死者が男性の場合と女性の場合の両方が訳されている。これは、その題からして、もともと死者の断気のあと、一定の処理を経て、遺体をお棺に入れて、遺族がお棺の蓋をする時に行うと考えられる。經典の内容においては、祖先のところへ帰るという考えも明らかに示される一方で、棺の利用や、グウスウの五色のシンボリズムには中国の影響がみとめられる点

- が注目できる。1994年の調査で汝南化からきたドンパの和士興氏が、屍を棺にいれる時つかう経典とっているのは、これかもしれない。拙稿1995, 35参照。
- (24) 和志武1993, 397, 開喪経第12番, 求福澤経と題する。この儀礼の解釈については、木麗春1995, 156-8に農俄紹と音写して説明がある。農俄は、物をはぐくむ霊力であり、死者の持っていたこの力を、遺族が取ろうとする内容であるという。Rock1952, 91, note (43) の1Nnū と 1Ō の註解, および楊福泉1991を参照。
- (25) ダという語を, Rock1952, 27では, 1D'a 3nv に対して勇者の葬儀と訳すように, 勇敢であることと理解する。
- (26) 和志武1993, 398, 開喪経第26番, Ddaiq yiq Chul ba jzil, 祭賢焼天香経と題する。
- (27) Rock1952, 26, 第37番に相当する。汚れを煙でいぶりだす意味出ある。同書, 634も参照。
- (28) 和志武1993, 397, 開喪経第17番, 超薦賢者開壇経と題する。訳は, 同氏1994, 183-189を, この儀礼の解釈は木麗春1995, 155以下の当務の説明を参照。
- (29) ダグウの経典は, 前註(28)の和志武訳では, 死者の虎のような能力をその息子に引き継がせるものというものであり, 和成順氏の説と違う。その理由は不明。
- (30) 和志武1993, 397, 開喪経第3番, 燃灯戴孝経と題する。訳は, 同氏1994, 213-7, Rock1955, 22-48, 174-8に見える。これは, 拙稿1995, 34に記した灯火経であり, 現在もこの儀礼は欠かせないと考えられている点で重要である。
- (31) 和志武, 1993, 398, 開喪経第32番, 祭男長寿者経と題する。Rock1952, 27に2Szi-lsher 1Ddu 3nv とある。
- (32) Rock1952, 129, note (108) および和志武1994, 51-7。
- (33) Rock1952, 130-1, note (109)。
- (34) オゼゼについては, 楊徳鑿, 和発源, 和雲彩1990, 74, 108, 宣科1991, 593-9, 木麗春1995, 344-352を参照。
- (35) 喪礼の第1日目と第2日目の夜に徹夜で歌われる挽歌は, 和志武1994, 234-246に訳されている。
- (36) オが父系親族, ノーが母系親族であることは, 麥克漢, 楊福泉(訳)1991, 387を参照。
- (37) 和志武1993, 398, 開喪経第55番, 献一切祭品経と題する。訳は同氏1994, 253-7, Rock1955, 152-172を参照。
- (38) 和志武1993, 399, 開喪経第63, 64, 65番, 引神路上中下冊と題する。Rock1937b に全訳がある。
- (39) 神路図の使用の状況は, 楊徳鑿, 和発源, 和雲彩1990, 81の図を見よ。
- (40) Rock1937b, 41によると, お棺の前が地獄で, 東北方向にのばして天堂にいたるといふ。しかし, Rock1955, 211によると, 神路図の神のいる天堂の最高の末端を死者の頭にもっとも近づけるといふ, 和成順氏と同じ説明になっている。
- (41) レイツウ鬼については, Rock1937b, 41-2を参照。ここでおこなわれるのは, 同書, 45,

lLä-ch'ouS lndshi レイツウ鬼を殺すことである。

- (42) Rock1937b, 56を参照。
- (43) Rock1937b, 55, ムナビとは地獄の9座の黒い丘を意味する。
- (44) これは餓鬼のことである。Rock1937b, 52, note (1)。
- (45) ギヤングは大きめの水をくむ容器, お盆であり, これをかぶせて牛頭鬼の靈魂を閉じ込める。Rock1937b, 112, note (1)。
- (46) この牛頭鬼は1Shi-2ndshi という名前である。Rock1937b, 53, note (1) および前註 (39) の図の右上を見よ。
- (47) ズウというのは, 身体がひかってしまうとげのある大きな樹木である。Rock1937b, 65。
- (48) Rock1937b, 97. 神路図の神の国には座禅している仏のような姿のおびたしい神が並んでいるが, Rock もいうように, それらの大部分は名前がドンパにすら知られていないのが特徴である。
- (49) Rock1937b, 106にも地方が13あるという。
- (50) 和志武1993, 398, 開喪経第52番, 献太牢經と題する。本来, 大量の犠牲が殺されたのであろうと推定できる。
- (51) 前註 (19) 参照。本文の前のところで, シーカー儀礼の定義を説明しながら, 和成順氏が, シーカーとはつまり開路のことであり, リジないシルジエをすることであると述べたのは, この儀礼の本質を述べていると考えられる。
- (52) この印象深い所作は, Rock1955, 138にも指摘されている。
- (53) 1983年3月29日から4月8日まで, 麗江で東巴達巴座談会が開催され, 61人のドンパと29人の学者が集まった。郭大烈1991, 674による。
- (54) 前註 (14) 参照。
- (55) 白庚勝氏の教示によると, この両人の像は, 女がカンメギュミキ開美久命金, 男がヅブユレプ朱普羽勒盤をあらわす。
- (56) 木麗春1995, 190には撫魯尤翠国と音写する。
- (57) 木麗春1995, 301によると, 白地とならんで, 麗江地区では, 汝南化が, 阿明什羅が積極的に活動をくりひろげた根拠地だったので, ドンパ教の中心地となっている。
- (58) 前註 (17) (18) 参照。
- (59) Rock1952, 26に見える。
- (60) シーカー儀礼もしくはシーング儀礼において, 神路図に先立って, 大ドンパがこのムトウ, 孟土と音写する, をにぎっておこなう儀礼がある。その經典の訳は, Rock1955, 188-198, および雲南省少数民族古籍整理出版規畫辦公室(編)1987, 107-485に見られる。和志武1993, 398, 開喪経第57, 58, 59番に相当する。過去において, 和国良氏の父, 祖父, 曾祖父たちは, 家に残っていて見ることができたムトウをにぎって, おそらくこの儀礼をおこなっていたのではなかろうか。この經典に書かれる死者のための道案内や教訓の内容は注目に値する。例

えば動物と出会いながら山谷を通り抜けて、最後に死に別れた近親と出会うという切実なもので、地獄の鬼や名も知らぬ多くの神がみの現われる神路図とは異なっている。さらに驚くべきことに、Rock 同書、220によると、神路図の後に、チベットの死者の書とあきらかにおなじ儀礼が追加されているのである。

- (61) 葬族のニムツビの儀礼は、馬学良1983, 97によれば、作斎と訳される。その整理によると、死者儀礼のうち、生路から死路に移る儀礼が作祭、死路から仙境に移る儀礼が作斎である。実際、火葬してマドという位牌をつくるのが作祭、ある期間を経てから、まとめてマドをまつりなおして岩穴に入れ、死者の靈魂を祖先のすむところへ送るのが作斎である。この2段階の処理をするという大きな枠組みは、納西族の場合には、前註(16)で述べたようにやや不鮮明になりつつあるが、それでもシーカー儀礼が作祭に、シーング儀礼が作斎に相当すると考えてよいだろう。ニムツビについて、ピモの語ったものに、吉克・爾達・則伙(述)1990, 71-112, 詳細な調査報告として、馬学良, 于錦綉, 范惠娟1993, 305-355および王康, 吉克・則伙・史伙1995が詳しく、祖霊信仰の理論的な整理は巴莫阿依1994がある。
- (62) 巴莫阿依1991, 381-398参照。
- (63) 馬学良, 于錦綉, 范惠娟1993, 244, 粗吉(粗尼木?)に相当すると思われる。粗尼木の儀礼については同書, 272-304に見える。調査中の9月24日に、ピモのチュビラク氏によって行われ、被治療者として参加したツモビの儀礼は、粗尼木の儀礼とたいへんよく似ているもので、儀礼の構造と所作のみでなく、ピモの儀礼に特徴的な、神枝を地面にたくさん挿す儀礼空間の意味について理解が深まった。
- (64) 馬学良, 于錦綉, 范惠娟1993, 248, 尼次日, および伍精忠1993, 133, 里次日に相当する。
- (65) 馬学良, 于錦綉, 范惠娟1993, 250, 尼日畢に相当する。
- (66) 同書, 249, 尼木窩皮に相当すると考えられる。
- (67) ピモの法具については、巴莫阿依1994, 147-155を参照。竹を素材とする法具があることに注目したい。
- (68) この占い方法については、王昌富1994, 221-223にも略説されている。
- (69) チュポがはじめて竹でマドと称される位牌をつくった話については、馬学良・于錦綉・范惠娟1993, 207に、「(伝説中の現在の人類の祖先である)曲布チュポ以前においては、人類は(今と違って)増えさかえることがなく、みな前後して死に絶えてしまった。チュポの時になって、マド位牌をつくりはじめると、それ以来、人類は増えさかえてきたので、それで代々位牌をつくるようになった」とある。また、伍精忠1993, 125に、「葬族の古代の習慣では、父母がなくなると火葬にして、子孫は遺灰の中から頭のひたいの骨をひとかけら取っておき、身につけて、それを祖霊とみなした。後にある時、移動中に、山のなかで祖霊をなくしてしまって、あちこち探したが見つからない。ちょうど竹林のなかでなくしたので、仕方がないから1片の竹のきれはしで代用することにした」という話を紹介する。吉克・爾達・則伙(述)1990, 170には竹崇拜の項目で、「むかし、人びとは祖霊を招いておそなえする時に、火葬の

あとで、頭のひたいにある三角の小さい骨を取って使っていた。後に、よくしまっておかなかったので、この骨をネズミに齧られてもっていかれた。ネズミは、石の穴にもぐりこんだので、石をはらいのけて探したが、見つからない。仕方がないので一粒のネズミの糞で代用した。不注意にもネズミの糞を竹林のなかに落として、またなくしてしまったので、今度は竹で祖霊をつくるしかなかった」という話がある。チュポの名が出ていなくとも、いずれも本文のチュポの話と関連性が深い。

- (70) 涼山地区のピモがおこなうニムツビは、15段階で、1段階ごとに1つの經典があると考えられる。本文で前に書いた、ニムツビにつかう經典は15種類あって、15本をひとまとめにしている、との説と符合する。ただし、1つ1つの段階の儀礼名称や、こまかい段階の区分は、異説もあるようである。于錦綉1993, 312-3, 王康, 吉克・則伙・史伙1995, 79-97を参照。
- (71) 馬学良, 于錦綉, 范惠娟1993, 327, 叉札に相当する。
- (72) 同書, 329, 木尼杜に相当する。
- (73) 同書, 331, 格地に相当する。
- (74) 同書, 331, 第4道場, 則書と苦思に相当すると考えられる。
- (75) 同書, 333, 司沙尼克に相当する。
- (76) 同書, 335, 赤克に相当する。
- (77) 同書, 339, 尼赫儿に相当する。
- (78) 同書, 340, 曲茨に相当すると考えられる。マド位牌を白色のに交換するという意味である、という。位牌の操作という点では、⑬チエと関連があると思われる。
- (79) 同書, 344, 沙に相当する。
- (80) 同書, 341, 治促に相当する。ヂゾオとは、樹をたてる、子をたてることをあらわす。
- (81) 同書, 341に訳出するヂゾオ經典に、「むかし、恩赫（人名）は、位牌もつくり、ニムツビもしなかつたから、子孫が10代で絶えた。舎舎という人も、そうしなかつたから、同じく8代で絶えた。格烏も、同じく7代で絶えた。曲補チュポ（この人の子孫が洪水の後の彝族の始祖の居木武吾である）は、位牌をつくり、ニムツビをしたので、そのために彝族の人びとは増えてさかえた。チュポの子孫の家支がすんでいるところ（具体的地名を列挙する）では、どこでもこの儀礼をする。そうすると格飛（天からくだってくる赤子の靈魂、筆者註）が空からおりてくるので、ピモはうれしくハハハと笑う。ピモが格飛をよびまねくと、死者の子孫たちはうれしくハハハと笑う。来たぞ、来たぞ。格飛が水をつたって、空から来たぞ」という言葉がある。巴莫阿依1994, 130に引く求育経にも、ヂゾオ儀礼が、邛布チュポから始まったことを述べる。話者のチュビクシ氏は、ピモとして、このような經典の知識を背景に持ちながら、本文で先に紹介したチュポの話をしたと思われる。
- (82) 馬学良, 于錦綉, 范惠娟1993, 224-5, 345, および巴莫阿依1994, 131-2, 博に相当する。
- (83) 馬学良, 于錦綉, 范惠娟1993, 347, 漠漠に相当する。この段階で、ピモが指路経を読んで、死者の靈魂に対して、祖先のすんでいるところまでの道案内をする。納西族の場合と比較し

て、神路図にあらわされるような地獄と神の国は想定されていない。むしろドンパガムトウ手杖をつかってする儀礼において読むような、山川を通り抜けて、死に別れた近親に再会する内容に近似する。前註(60)を参照。美姑の指路経の訳は、果吉・寧哈、嶺福祥(編)1993、656-664にある。

(84) 前註(63)を参照。

(85) スニになる過程でビモが役割をはたすことの例は、馬学良、于錦綉、范惠娟1993、233、237にも見られる。

参考文献

中文・和文文献

- 于錦綉 1993, 「彝族《指路経》与“拜祖教”——兼論原始宗教的定義, 分類等問題一」, 左玉良, 陶学良(編)1993に所収
- 雲南省少数民族古籍整理出版規畫辦公室(編)1986, 1987, 1989, 『納西東巴古籍譯注(一), (二), (三)』, 雲南民族出版社
- 王康, 吉克・則伙・史伙 1995, 『四川省凉山彝族自治州喜德県李子郷傑糾村的靈姆』, 施合鄭民俗文化基金会
- 王昌富 1994, 『凉山彝族礼俗』, 四川民族出版社
- 戈阿干(編)1988, 『納西族東巴文学集成 祭天古歌』, 中国民間文艺出版社
- 果吉・寧哈, 嶺福祥(編)1993, 『彝文《指路経》譯集』, 中央民族学院出版社
- 郭大烈, 楊世光(編)1991, 『東巴文化論』, 雲南人民出版社
- 郭大烈 1991, 「東巴文化大事記」, 郭大烈・楊世光(編)1991に所収
- 吉克・爾達・則保(述)1990, 『我在神鬼之間——一個彝族祭司的自述』, 雲南人民出版社
- 伍精忠 1993, 『凉山彝族風俗』, 四川人民出版社
- 左玉良, 陶学良(編)1993, 『畢摩文化論』, 雲南人民出版社
- 宣科 1991, 「对《熱美蹉的來歴経》的討論」, 郭大烈・楊世光(編)に所収
- 巴莫阿依 1993, 『凉山彝族的“曉補”反咒儀式』, 左玉良, 陶学良(編)に所収。
- 巴莫阿依 1994, 『彝族祖靈信仰研究』, 四川民族出版社
- 馬学良 1983, 『雲南彝族礼俗研究文集』, 四川民族出版社
- 馬学良, 于錦綉, 范惠娟 1993, 『彝族原始宗教調查報告書』, 中国社会科学出版社
- 麦克漢, 楊福泉(訳)1991, 「骨与肉: 納西伝統建築空間結構中体现的宇宙觀和社会關係」, 郭大烈, 楊世光(編)に所収
- 木麗春 1995, 『玉龍三国巡源流 東巴文化揭秘』, 雲南人民出版社
- 楊德鎣, 和發源, 和雲彩 1990, 『納西族古代舞蹈和舞譜』, 文化芸術出版社
- 楊福泉 1991, 「東巴教所反映的生殖崇拜文化」, 郭大烈・楊世光(編)に所収
- 李霖燦 1984, 『麼些研究論文集』, 台湾国立故宫博物院

- 和士成 (述), 和力民 (整理) 1994, 「東巴大祭風」, 『山茶』, 第81期
 和志武 1993, 『中国原始宗教資料叢編 納西族卷』, 上海人民出版社
 和志武 1994, 『東巴經典選訳』, 雲南人民出版社
 丸山宏 1995, 「納西族の民俗宗教に関する諸問題—道士・サニ・ドンパについて—」, 『比較民俗研究』, 第11号

欧文文献

- Rock, Joseph F. 1937a, Studies in 1Na-2khi Literature, part I : The Birth and Origin of 2Dto-1mba 2Shi-2lo, in Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient, t. XXXVII
 Rock, Joseph F. 1937b, Studies in 1Na-2khi Literature, part II : The 1Na-2khi 1Hä-2zhi 1p'i, in Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient, t. XXXVII
 Rock, Joseph F. 1939, The Romance of K'a-mä-gyu-mi-gkyi, in Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient, t. XXXIX
 Rock, Joseph F. 1948, The 2Müañ 1bpö Ceremony or the Sacrifice of Heaven as practiced by the 1Na-2khi, in Monumenta Serica vol. XIII
 Rock, Joseph F. 1952, The Na-khi Näga Cult and Related Ceremonies, Instituto Italiano Per Il Medio ed Estremo Oriente, Serie Orientale Roma IV
 Rock, Joseph F. 1955, The 2Zhi-1mä Funeral Ceremony of the 1Na-2khi of Southwest China, St. Gabriel's Mission Press, 1972 Johnson Reprint

(1996年2月29日稿了)



延寿經を読む納西族のドンパ



驅鬼經を読む彝族のピモ